

「学校保健の果たす役割を考える ～心も体も安全で安心して成長できる学校とは」

道教組養護教員部 和田千鶴子

1. はじめに

ロシアによるウクライナ侵攻、イスラエル・ハマスの紛争と海外では罪のない多くの市民が犠牲になる戦争が続けられています。また国内では、円安による経済不安や物価の高騰と増税という私たちの生活を苦しめる経済状況が続いています。

今年の5月から新型コロナウイルス感染症は5類に移行となりました。コロナ禍が子どもたちの発達や健康に様々な影響を与え、コロナ感染やワクチンの後遺症に苦しむ子どもたちがいます。三年間のコロナ禍を検証し記録を残すことは今後のためにも重要です。ユニセフの調査によると、コロナ禍で日本は世界で一番学校を開いていました。休校日数を世界で最も少なくできたのは養護教諭【yogo teacher】がいたからであるとの研究者の発言がありました。

先月、文部科学省から発表された2022年の不登校数は29万9048人、いじめ件数は68万1948件とどちらも過去最高となりました。小中高の自殺者数は514人と、こちらも過去最高数となっています。

このような厳しい状況の中で、保健室で子どもたちの声を聞いてみました。

「エアコンがない夏の教室での勉強はもう限界です。」「授業のZOOM配信が不確かです。」「昔のように売店を作ってほしい」「市街の勉強スペースがことごとく縮小され勉強できるところが減ってしまった。」「冬期間、朝のバスが混みすぎているのに本数が増えない、乗れずに遅刻する人がいる。」子どもたちの生活を支えきれていない社会が見えた思いでした。

まだまだ先行き不透明な日々が続きますが、真摯な子どもたちのキラキラと輝く瞳と豊かな成長に希望を託して、子どもたちのための学校と学校保健を考えていきましょう。

今年も、皆さんのレポートから子どもたちの実態を紐解き、様々な実践から学び、語り合いたいと思います。養護教諭が実践を積み重ね、保健室がすべての子どもたちにとって安心と信頼と希望を得られる場所であり続けることを願って止みません。

(北海道旭川商業高等学校 高松 葉子)

2. レポート発表から

(1) 本校の性教育の取り組み～性の多様性をどう取り入れるか S氏(宗谷教職員組合)

小規模複式校の性教育で、高学年に取り入れた「性の多様性」についてのレポートである。子どもたちの感想では、「表現の性や好きになる性について知らなかった。」「ニュースになっているからもっと考えたい」など学習することで意識や考えが広がる様子がうかがえる。これまで性教育で行っていたエイズの取り扱いについて交流がされた。小学校では体育の保健分野で、中学校では性感染症の一つとして扱っていた。教育課程編成や社会情勢や子どもの実態に合わせて、性教育の指導計画の見直しをしていきたい。さらに、進学先の中学校や高校でスカートが嫌だという生徒がいた場合の対応についての交流がされた。

(2) 保健教育の実践～人間関係スキルアップ授業の取り組み G氏(根室教職員組合)

言いたいことが言えない関係、トラブルを避けて言わないことで不満ばかり募る児童に、人間関係作り

とつながる力を育みたいという課題を生徒指導部で話し合い、「人間関係スキルアップ授業」を全学年計画し取り組んだレポートである。特に高学年で行った、その人ならではのエピソードを添えた児童一人一人の「素敵カルタづくり」は、それだけに終わらず全校縦割りの素敵カルタづくりにつながった。友だちの良いところに着目し言葉にして伝えるところと児童の自己肯定感 up に成果が見えた取り組みである。授業で学んだことを実生活にどうつなげていくかは難しいが、後に「授業でやったよね」と機会あるごとにフィードバックできているところが良い。

(3) 児童の視力の状況について

○氏（松山教職員組合）

昨年の○氏のレポートで、スポットビジョンスクリーナーによる屈折異常検査が話題にあがっていた。今年は、スポットビジョンスクリーナーを使用して町の保健師と協力して進めた取り組みの報告である。小学生で視力1.0未満が半数近くに上る実態や高齢者に多い目の病気にかかる児童の例もあったことから、希望者に機器による屈折異常や斜視のスクリーニングをし、さらに眼科検診につなげ受診勧奨を行っている。低学年でも遠視がいなくて近視が多く、そこから見えるのは子どもの目の発達が変わってきていることだと言う。学校ではICTを使用した授業の取り組みが進められ、家庭では長時間のスマホ使用や動画視聴がされて、子どもの視力低下問題が置き去りにされている。視力と頭痛の関係も見逃せない。町と専門医とともに考えていく取り組みは、今後他の地域でも参考になるものである。

(4) 大規模校の日常 ～忙しさに逃げずに何を目指すか

N氏（全上川教職員組合）

大規模校の保健室の日常を振り返り、忙しさの中でも子どもの実態をどうとらえていくか考えるレポートである。養護教諭1人では対応しきれない時は職員室の先生に手伝ってもらおう状況に、複数配置の必要性を切に願うものである。学校も教室も楽しい時は保健室も楽しい場であっていいが、学校や教室が楽しくない時は保健室だけが楽しいところになってしまうと来室がすごく増えてしまい、本当にケアを必要としている子に手が行き届かない。理想の保健室と現実の狭間で養護教諭として何ができるか、子どもの心を豊かにする実践をできないか模索している。

(5) 保健室で関わる生徒の対応

W氏（宗谷教職員組合）

中学校の保健室で様々な理由で来室する生徒の対応のレポートである。「教室に入れない」生徒といっても理由は様々で、悪口を言われる、自閉傾向で教室のザワザワが嫌、愛着を求める、男子が苦手などである。保健室で休むことでエネルギーをため、なぜ入れないのか、どうしたいのかを聞き取り、それを担任や学年に伝え、担任の思いをかみ砕いて伝えるという作業を行っている。「保健室は体の不調を理由にいつでも来られる場所。本当は具合が悪くなくても不調を理由に来室し、そこから困っていることがわかる」と教職員に伝えている。保健室のスタンスを理解してもらい先生方と連携しながら試行錯誤している。

(6) この夏の熱中症対策を振り返る

N氏（高教組）

ここ数年夏の暑さが増していたが、今年の猛暑は子どもたちが安全に学校で過ごすことを脅かすものであった。その中で、高校で行った熱中症対策と今後考えていきたいことをまとめてくれている。対応の一つとして、保健だよりでの知識の伝達を5月より3回に分けて行っている。暑さ指数の掲示で注意喚起、エアコンがついている保健室を休日も熱中症対応で積極的に使うよう勧めているなどを行っている。

熱中症警戒アラートが発令された際には、一斉下校や臨時休校にもなった。エアコンのない学校で過ごさず家に帰すという判断も必要だが、学校をより安全にしていけることも必要ではと N 氏は言う。また、生徒が自身の体調に目を向けたり、環境の変化に対応できる体力を自ら作ることができるよう働きかけたいとしている。エアコンやスポットクーラーの設置の要望や WGBT 測定器など安全な学校環境を整えていくことも大切である。

(7) ある救急対応の記録

A 氏（高教組）

ガラスを割ってケガをして救急車を呼ぶという対応から、どうするべきだったかを振り返るレポートである。突然の、大怪我が起こったときの対応を当該生徒に対する処置、養護教諭の動き、教員の動き、周りの生徒の動き、動揺する生徒の対応などケガをした状況の分析をすることで今後活かすことができる。高校生ともなれば、自分たちで今までの知識や経験から緊急時の対応ができる部分もあり、ケガの対応をした生徒もいたが、その生徒に対するフォローも大切であった。今回は、生徒や教職員の連携で自分自身が気付かなかったことがたくさんあったとのことだったが、迅速な対応ができたことは幸いである。生徒の普段の動きと設備や校舎の作りの関係もケガを防いでいくうえで重要なことであることが出されていた。

3. 討議から

■子どもたちのコミュニケーションの現状と子どもたちの心が豊かになる取り組みについて

心が豊かになる実践として、コミュニケーションや自己肯定感を高めることをねらったスクールカウンセラーによる高校の授業が紹介された。話の聞き方、話し方、会話の仕方などを実際にやってみる内容である。小中学校でこのようなことを体験してくると豊かになるのではないか。ある小学校では3～6年が年に数回、話し方や聞き方の勉強を実践的に行っており、学級指導だけでなく異学年で行うのが効果的であるとのことであった。また、違う小学校では5年生の保健学習こころの健康が出てくるのでアサーションなどを行っている。心の支援をどうするかということが課題である。教室にいられない、嫌なことはやりたくない、廊下をウロウロする、トイレに引きこもってしまうなど校種関係なく増えている。

学習会、実態や実践の交流、医療的ケアともつながり、生きた実践につなげていきたい。G 氏のレポートで報告されたカルタの実践は、子どもたちの自己肯定感を高めるのに効果のある実践で、やってみたいという声が多数あがった。

4. 参加者より

- ・自己肯定感が低い子が多い。自発的にやってみたいと思ったことをやってみる経験が少ないのではないかと職場で話している。大人の側の指示や失敗させない育てた方があるのではないかと反省から今、実践している。
- ・保健室対応をしていて、これでよかったのかなと振り返ることが多い。今日の分科会は勉強になった。
- ・教室に入れないう子の対応では、楽しい空間を学校の図書室にする体制を作っている。学校サポーターとして保護者の方が対応しているので、そのような子たちが保健室に行くことは少ない。地域との連携が大事になっている。
- ・いつもは保健体育教員と話すことが多いが、養護教諭の視点を聞くことができて良かった。熱中症の対

応では、自分自身の認識を高めるためにも色々な視点からの話を聞いて、冷静に分析することは大事だと思った。

- ・素敵カルタの実践は、健康を考える上で人間関係が整っていないと本当の意味での健康につながっていないと思った。授業の中で褒め合うことを意識できても、普段の生活で褒め合うことはできていない。大人自身が褒め合うことを大事にしていきたい。
- ・視力とICTでは、目の発達の視点は保健体育として大事なことと気付かされた。運動するうえで、見える見えないは大事になってくる。

5. おわりに

子どもたちの体や心が安全で安心であることとはどういうことなのかを今回の7本のレポートで学べた。学校のシステムの問題、取り組みの中身の問題、子どもたちの置かれている状況の問題、予算の問題など色々なことが絡み合っていて、どこから手を付けたらよいのか悩みながらの毎日である。大人がしたいことだけでなく、子ども自身も学んで自分でできるようになっていくところに、教師自身がどのような視点をもってどう支援していくかが大事であるし、明日からの実践にどうつなげていくかのヒントを得られた分科会であった。